

# 现代日语 语言学概论

崔 崧 / 著



外文出版社  
FOREIGN LANGUAGES PRESS

# 现代日语 语言学概论

崔 崧 / 著



H36-43  
C980



外文出版社  
FOREIGN LANGUAGES PRESS

图书在版编目 (CIP) 数据

现代日语语言学概论 / 崔崑著. —北京: 外文出版社, 2009

ISBN 978-7-119-01560-6

I. 现… II. 崔… III. 日语—语言学—高等学校—教材 IV. H36

中国版本图书馆 CIP 数据核字 (2009) 第 200780 号

责任编辑: 刘承忠 王际洲

装帧设计: 佳禾书装

印刷监制: 张国祥

## 现代日语语言学概论

---

作 者: 崔 崑

©2009 外文出版社

出版发行: 外文出版社

地址: 北京西城区百万庄大街 24 号 邮政编码 100037

网址: <http://www.flp.com.cn>

电话: (010) 68320579 / 68996067 (总编室)

(010) 68995844 / 68995852 (发行部)

(010) 68327750 / 68996164 (版权部)

印 制: 北京外文印刷厂

经 销: 新华书店 / 外文书店

开 本: 880×1230mm 1/32

印 张: 11.75

字 数: 450 千字

装 别: 平

版 次: 2009 年第 1 版, 2009 年 11 月第 1 版第 1 次印刷

书 号: ISBN 978-7-119-01560-6

定 价: 28.00 元

建议上架: 外语

版权所有 侵权必究 如有印装问题本社负责调换 (电话: 68995852)



# 前言

笔者的《日语通论》自2003年问世以来已历时整整六个春秋。这期间，不仅日语语言本身发生了很大变化，而且研究日语的学问——日语语言学更是有了突飞猛进的发展。在讲授日语语言学的过程中，自己时常感到该书的一些内容已跟不上当前的日语教学和研究的需求，萌生了撰写一部富有时代感的概述日语语言学的新书的想法。


与《日语通论》相比，无论从形式还是内容上《现代日语语言学概论》都有了整体的提高和充实。首先，增加了新的内容，如“第一章 语言学的分支——日语语言学”；“第六章 认知语言学”；“第四章中的进入中国的和制汉字词”；“第五章中的数词同中日两国文化”等内容。其次，对绝大部分的图表进行了撤换和更新。另外，对各章节中的具体内容也都做了适当的调整和补充。

本书的编写以理论与实践相结合为着眼点，力求全面系统、简明扼要地阐述现代日本语言。全书由六章构成。第一章 语言学的分支——日语语言学；第二章 日语语音与音韵；第三章 日语文字与表记；第四章 日语语汇与语义；第五章 日语语法；第六章 认知语言学。与同类书相比，本书在以下方面形成了自己的特色：

一 便于操作。该书的写作来源于教学第一线，是笔者多年来教学工作的总结和感悟，注重科研理论与教学实践的结合，因此在日语教学实践的过程中具有较强的可操作性。例如，在各章节中最后部分设置的讨论题既是对全篇内容的梳理也是对今后问题的思考。

二 内容广泛。从语音文字到词汇语法，本书涉及了现代日语的方方面面。人们常说，学科相互渗透，知识触类旁通。通过阅读本书，读者可对现代日语形成一个整体框架。

三 取材新颖。为编写本书，笔者曾参阅了历年来特别是近几年日本的国语学、日本语学和我国国内的日语研究、日语教育等方面的新的研究成果。例如，在敬语一节中，将日本新一代的日本语学专家、学者的观点融于本书之中。第六章的认知语言学中的内容体现了语言学界带有前瞻性的观点和理论。




四 针对性强。日本出版的「国語学」是以日本人为读者对象，主要从历时语言学的角度概述日本语。本书是以中国日语学习者为主要读者对象，从共时语言学的角度概述日本语。为加深印象、便于理解，各章节常常采用中日语言对比的方式进行阐述。

笔者认为，欲阐述一国语言若使用他国文字势必隔靴搔痒、令人费解。况且，对读者而言，相关的专业术语又难以查找，因此，本书行文通篇使用日语。


本书的读者对象为大学日语专业3、4年级本科生、研究生及从事日语教育、日语研究的教师和研究人員。另外，因其可读性，也可适用于具有中级日语水平以上的日语学习者。

由于篇幅及笔者能力所限，本书不可能涉及所有的语言现象，更不可能对某一语言现象剖析得很深很透，不足之处敬请同行及读者批评指正。




在本书的编写过程中，笔者曾参阅了大量的中外文献资料，在此谨对原作者表示由衷的敬意。另外，本书是“燕山大学教材出版基金资助出版”项目(编号为燕大教学(2009)3号)，值此机会深表谢意。

崔 崑



# 目次



## 第一章 言語学の一分野としての日本語学

1-1	言語研究とその分野	001
1-1-1	現代言語学とソシユール	001
1-1-2	言語学の研究分野	003
1-2	日本語と日本語学	003
1-2-1	記述対象としての日本語	003
1-2-2	日本語学と日本語教育	004
1-2-3	国語学と日本語学	005
1-2-4	研究の諸分野	006
1-3	日本語の系統	007
1-3-1	言語の系統と分類	007
1-3-2	日本語系統論	007



## 第二章 日本語の音声と音韻

2-1	音声学あれこれ	009
2-1-1	音声と音声学	009
2-1-2	音声器官	010
2-1-3	有声音・無声音	011
2-1-4	母音・子音・半母音	011
2-1-5	調音点・調音者	012
2-1-6	調音法	013
2-2	日本語の発音の単位	013
2-2-1	仮名の単位	013
2-2-2	モーラと音節	014
2-2-3	ローマ字の単位	015
2-2-4	単音と音素	015
2-2-5	音素と異音	016

2-2-6	拍と音素の関係	017
<b>2-3</b>	<b>日本語の発音と問題点</b>	<b>019</b>
2-3-1	母音	019
2-3-2	母音の問題点	020
2-3-3	子音	021
2-3-4	子音の問題点	024
2-3-5	半母音	027
2-3-6	特殊音素	027
2-3-7	日本語の音節	032
<b>2-4</b>	<b>日本語のアクセント</b>	<b>034</b>
2-4-1	アクセントの性質と種類	034
2-4-2	日本語のアクセントの機能	034
2-4-3	共通語のアクセント	035
<b>2-5</b>	<b>イントネーション</b>	<b>042</b>
2-5-1	イントネーションの性質	042
2-5-2	イントネーションの種類	043
<b>2-6</b>	<b>プロミネンス</b>	<b>044</b>
2-6-1	プロミネンスの性質	044
2-6-2	プロミネンスを表す方法	045
2-6-3	プロミネンスの型	046
<b>2-7</b>	<b>音声文法</b>	<b>047</b>
2-7-1	語レベルにおける音声	048
2-7-2	文節レベルにおける音声	048
2-7-3	文レベルにおける音声	048



### 第三章 日本語の文字と表記

<b>3-1</b>	<b>文字の性格</b>	<b>050</b>
3-1-1	文字とは何か	050
3-1-2	文字の役割	050
3-1-3	文字の分類	052
<b>3-2</b>	<b>漢字</b>	<b>054</b>
3-2-1	漢字の特色	054
3-2-2	漢字の構成	055

3-2-3	漢字の組み立て	056
3-2-4	漢字の機能	059
3-2-5	漢字の読み方	063
3-2-6	漢字の書き方	069
3-2-7	国字と宛字	070
3-2-8	現代の漢字の意味	072
<b>3-3</b>	<b>平仮名</b>	<b>074</b>
3-3-1	万葉仮名	074
3-3-2	平仮名の辿り	075
3-3-3	漢字平仮名交じり文	075
<b>3-4</b>	<b>片仮名</b>	<b>076</b>
3-4-1	片仮名の使用	076
3-4-2	片仮名の字体	077
<b>3-5</b>	<b>ローマ字</b>	<b>078</b>
3-5-1	ローマ字の辿り	078
3-5-2	ローマ字の使用	079
<b>3-6</b>	<b>日本語の表記</b>	<b>082</b>
<b>3-7</b>	<b>符号</b>	<b>083</b>
3-7-1	句読点	083
3-7-2	くりかえし符号	086



## 第四章 日本語の語彙と意味

<b>4-1</b>	<b>語彙総論</b>	<b>088</b>
4-1-1	語彙研究	088
4-1-2	日本語語彙の特徴	090
<b>4-2</b>	<b>語・語彙・語彙論</b>	<b>092</b>
4-2-1	語と語彙	092
4-2-2	語彙論	094
<b>4-3</b>	<b>意味</b>	<b>102</b>
4-3-1	意味の性質	102
4-3-2	対象の意味と感情的意味	103
4-3-3	意味の構造と発展	104



<b>4-4</b>	<b>単語の系列</b> .....	108
4-4-1	類義語 .....	108
4-4-2	反対語 .....	109
4-4-3	意味の広い単語と狭い単語 .....	111
4-4-4	同音語 .....	112
<b>4-5</b>	<b>単語の位相</b> .....	113
4-5-1	概説 .....	113
4-5-2	特定の分野で使われる単語 .....	114
4-5-3	特殊な文体の単語 .....	115
4-5-4	特定の使い手だけが使う単語 .....	116
4-5-5	古い単語と新しい単語 .....	117
<b>4-6</b>	<b>語種</b> .....	120
4-6-1	概説 .....	120
4-6-2	和語 .....	124
4-6-3	漢語 .....	125
4-6-4	外来語 .....	135
4-6-5	混種語 .....	139
<b>4-7</b>	<b>単語の構成</b> .....	142
4-7-1	合成 .....	142
4-7-2	複合 .....	145
4-7-3	派生 .....	147
4-7-4	転成語 .....	149
4-7-5	略語 .....	150
<b>4-8</b>	<b>特殊語彙</b> .....	151
4-8-1	擬音語・擬態語 .....	151
4-8-2	慣用語 .....	153
<b>4-9</b>	<b>辞書</b> .....	155
4-9-1	辞書の種類 .....	155
4-9-2	国語辞典の内容 .....	156
4-9-3	コーパスとコーパス言語学 .....	158



<b>5-1 文法と文法論</b> .....	160
5-1-1 文法と文法論 .....	160
5-1-2 文法学説 .....	161
5-1-3 文法の単位 .....	172
5-1-4 品詞分類 .....	179
<b>5-2 体言</b> .....	184
5-2-1 名詞 .....	185
5-2-2 形式名詞 .....	186
5-2-3 数詞 .....	187
5-2-4 代名詞 .....	190
<b>5-3 用言</b> .....	193
5-3-1 活用とは .....	193
5-3-2 動詞 .....	194
5-3-3 形容詞 .....	196
5-3-4 形容動詞 .....	199
<b>5-4 助詞・助動詞</b> .....	201
5-4-1 助詞 .....	202
5-4-2 助動詞 .....	206
<b>5-5 その他の品詞</b> .....	209
5-5-1 副詞 .....	209
5-5-2 連体詞 .....	211
5-5-3 接続詞 .....	212
5-5-4 感動詞 .....	214
<b>5-6 日本語のボイス</b> .....	215
5-6-1 受身表現 .....	216
5-6-2 使役表現 .....	220
5-6-3 可能表現 .....	221
5-6-4 自発表現 .....	223
5-6-5 授受表現 .....	224
<b>5-7 日本語のテンス</b> .....	231
5-7-1 テンスの定義と特徴 .....	231
5-7-2 テンスから見た述語の分類 .....	232
5-7-3 文末に現れる「ル」と「タ」 .....	234

5-7-4	文中(従属節末)に現れる「ル」と「タ」	235
5-7-5	いろいろなムードの「タ」	237
5-7-6	注意点	239
<b>5-8</b>	<b>日本語のアスペクト</b>	<b>243</b>
5-8-1	アスペクトの定義と特徴	243
5-8-2	テ形+補助動詞	243
5-8-3	動詞の連用形+補助動詞	250
5-8-4	その他の形式	252
5-8-5	注意点	253
<b>5-9</b>	<b>日本語の敬語</b>	<b>253</b>
5-9-1	敬語の性格と分類	253
5-9-2	素材敬語と対者敬語	254
5-9-3	尊敬語	254
5-9-4	謙譲語・丁重語	256
5-9-5	丁寧語・美化語	258
5-9-6	注意点	261



## 第六章 認知言語学

<b>6-1</b>	<b>認知言語学のあれこれ</b>	<b>265</b>
6-1-1	認知科学とは	265
6-1-2	認知言語学とは	266
6-1-3	言葉の理解と認知モデル	267
<b>6-2</b>	<b>言語学研究の歴史沿革</b>	<b>271</b>
6-2-1	ソシュールの構造主義言語学	271
6-2-2	チョムスキーの変形生成言語学	272
6-2-3	レイコフ、ラネカーの認知言語学	273
<b>6-3</b>	<b>認知言語学の基本概念</b>	<b>276</b>
6-3-1	プロトタイプ	276
6-3-2	メタファー・シネクドキー・メトニミー	281
6-3-3	イメージスキーマ	289
<b>6-4</b>	<b>認知意味論</b>	<b>292</b>
6-4-1	語の意味	292
6-4-2	句の意味	302
6-4-3	類義語表現の意味	309

<b>6-5</b>	<b>認知文法論</b>	315
6-5-1	文法化	315
6-5-2	イメージスキーマと概念領域の拡張	324
6-5-3	プロトタイプと主観的認識	342
<b>6-6</b>	<b>認知・言語・文化・社会</b>	346
6-6-1	文化へのアプローチ	346
6-6-2	メタファーと文化モデル	347
6-6-3	構文の談話機能	350
6-6-4	言語と思考	351
<b>主要参考文献</b>		359

# 第一章 言語学の一分野としての日本語学

## 1-1 言語研究とその分野

### 1-1-1 現代言語学とソシュール

言語は思考や感情を表現したり、意志を伝達したりするために機能する記号の体系である。言語学は言語(言葉)を対象とする学問である。現代的な意味での言語学の基礎を作ったのがスイスの言語学者ソシュール(Ferdinand de Saussure)である。ソシュールの理論は死後刊行された『一般言語学講義』によって知ることができる。ここではその中でも特に重要な3つの概念について見ていく。

#### 1 言語記号の恣意性と社会性

日本語で「イヌ」と呼ばれている生き物は英語では“dog”、中国語では「狗」と呼ばれている。これは、そのものの呼び方とそのものの概念との関係は必然的なものではないことを示している。例えば、今「イヌ」と呼ばれている生き物を「ネコ」と呼んでもかまわなかったわけである。このように、人の言葉では、記号とその名前との間に何ら必然的な関係はない。一般に、言語記号はそれを表す音声的側面(指すもの signifiant)とそれが指示する対象(指されるもの signifie)を持っているが、両者の間には必然的な関係は全くない。

このことはソシュールは言語記号の恣意性と呼んでいるが、これは各言語が異なることを保障するものである。なお、言語記号の恣意性はそれが切り取る外界のありようにも見られる。例えば、日本語では同じ親から生まれた男の子供は「兄」か「弟」に区別される(従って、「これは私の兄/弟です」と言っても「※これは私の兄弟です」とは言わない)のに対し、英語では両者は共に“brother”と呼ばれる(従って、“This is my brother.”という表現が可能になる)。

言語の恣意性というのは言葉に初めて名前がつけられたときの性質である。いったん名前がつけられてしまうと、それを個人の意志で変

えることはできない。例えば、「イヌ」という音が嫌いだからといって今「イヌ」と呼ばれている生き物を「ネコ」と呼んでも(他の人が理解してくれないため)通じない。つまり、言語記号はいったん呼び方が決まってしまうとそれを個人が変更することはできないのである。これを言語の社会性という。

## 2 ラングとパロール

「かかと(踵)」という語を発音してみると、 $[k_1 a k_2 a to]$ の $k_1$ では息が出ているのに $k_2$ では息が(ほとんど)出ていないことが分かる。同様なことはtitleの二つのt音についても言える。この場合、二つのk音、t音は物理的には異なっているわけだが、日本語母語話者、英語母語話者はそれを同一の音と認識している。このように、母語話者は言葉に対する抽象的な知識を持っており、さまざまな変異を含んだ実際の音声とその知識に照らして認識しているのである。ソシュールはこの抽象的な知識(上例では物理的性質の違いを無視したk、t音。これが「音素」である)を**ラング**、ラングが実際に発現したものを**パロール**と呼んでいる。音韻論や統語論は母語話者の持つラングとしての知識を考察する対象とするものである。そこではその文を発した人の属性やその場の状況などの要因は無視される。一方、語用論や社会言語学は言葉の持つパロール的な解明を目指すものである。

## 3 共時言語学と通時言語学

ソシュールの指摘の中でもう一つ重要なのは共時言語学と通時言語学の区別である。**共時言語学**というのはある特定の時代の特定の言語の研究であり、**通時言語学**というのはある特定の言語の歴史的研究である。

ソシュールは共時言語学と通時言語学が異なる性質のものであること、この2つの研究を混同してはならないことを説いた。ソシュール自身は通時言語学で大きな業績を残した人だが、それにもかかわらず、彼は歴史一辺倒だった19世紀の言語学を批判し、共時言語学の重要性を力説した。現代語の研究が言語学の中で正当な地位を占めるにあたってソシュールのこの指摘は重要な役割を演じた。

## 1-1-2 言語学の研究分野

言語学は文字通り言語(言葉)について研究する学問であり、その中には次のような分野がある。

**音声学:** 言語音の諸特徴を記述し研究する。

**音韻論:** 意味の弁別に関与する最小単位である音素の特定やその分布の研究を行う。

**形態論:** 意味を持つ最小単位である形態素の特定や分布の研究を行う。

**統語論:** 文の構成要素である語の配列に関する問題を研究する。

**意味論:** 語や文が持つ意味に関する問題を扱う。

**語用論(運用論):** 文が実際の状況下でどう使われるかを研究する。

**社会言語学:** 言語活動の参加者間の社会的属性(性、年齢、出身地など)と言語の関係を論じる。

**心理言語学:** 言語処理、言語習得、言語障害などの問題を扱う。

**類型論:** 世界の諸言語の持つさまざまな性質をいくつかの観点(語順など)から観察し、その類似、相違について論じる。

### 【研究課題】

1. 言語の恣意性と社会性について、それぞれ例を挙げて述べなさい。
2. ラングとパロールの区別をなさい。
3. 例を挙げて、通時言語学と共時言語学の相違点を書きなさい。
4. 言語学の下位分類として、普通、何と何があるか。

## 1-2 日本語と日本語学

### 1-2-1 記述対象としての日本語

日本では公用語である日本語が話されている。しかし、よく観察すると、ある人が話す「日本語」に、発音や使用する語彙などにおいて、他の人の話す「日本語」と多少なりとも違いが見られることがある。極端な例ではあるが、青森の方言を話す人と、沖縄の方言を話す人が互いに自らの方言で会話した場合、意志が伝達できるかは疑わしい。このように、話者の育った時代や地域、また性別・階級・職業など、さまざまな

要因によって、一口に「日本語」と言ってもそこにはさまざまなバリエーション(変種)が見られるのである。(兼吉)方言の地理学

日本語について研究する分野を日本語学というが、一般に「…語」という言語を記述したりする場合、具体的にどのようなものが対象となるのであろうか。上述したように、ソシュールがこの点に関して、ラングとパロールという区別を立てたことは有名である。前者は、ある言語社会の成員に共通の財産となっている、慣習としての抽象的・一般的な言語(「言語」とも訳す)を言い、後者は、ある個人によって、その社会に共通な慣習としての言語が実際に、あるとき、ある場所で使用された、具体的・個別的なもの(「言」とも訳す)を言う。このうち、ラングが記述・研究する対象として扱われるのである。本書でいう「日本語」とは、特別な場合を除いて、日本という社会で共通に用いられる言語を記述対象とすることから、すなわちいわゆる「共通語」のことを指す。

### 1-2-2 日本語学と日本語教育

日本語学とは、日本語を研究対象とする学問であり、日本語を科学的に研究する学問である。日本語学というのは文字通り「日本語についての学」である。この言葉が使われるようになったのは比較的新しく1980年代頃からである。それまで「国語学」と呼ばれていた分野の中から、特に現代語の文法の研究者が中心となって「日本語学」という名称を使い始めたようである。

「日本語学」という名称が使われるようになった大きな要因の一つは日本語教育の発達である。1970年代から日本語教育への需要は徐々に高まってきた。日本語教育からの刺激は日本語を一つの対象言語として客観的に扱うという機運を作った。つまり、日本語学は、言語学の一分野としての日本語研究ということである。日本語教育は、日本語学によって、語学教育にどのように利用するかを考案する部門である。すなわち、日本人に対するよりも、外国人にいかに日本語を教えるか、その方法と手段を重視している。日本語学を理論物理学とすれば、日本語教育は応用物理学にたとえられる。



### 1-2-3 国語学と日本語学

国語学というのは日本人の立場に立ってという話しではあるが、国語学と日本語学は、日本語を研究対象とする同学の双生児である。国語学は時間的軸に沿って上古から現代にいたる言語の歴史変遷の追究に力点が置かれてきた。『古事記』を始めとする文献資料の考証に基づき、国学の伝統をふまえて、各時代の語法の解明に意を注ぎながら、日本語そのものに集約して研究が続けられてきた。

山田孝雄、橋本進吉、時枝誠記のような国語学者は、独自の文法理論を打ち立て、これによって国文法の分析を試みている。そこで、例えば、「陳述」とは何かをめぐって、各自の文法論が競合し、語の分類や名称について論議が繰り返された。国語学では、方言研究を含め、現在の日本語の掘り下げも盛んである。国語教育は古典文法という形で、古文解釈の手段を提供するとともに、日本人の学生に国語国文の栄養を注ぎ込むことに努力を重ねてきた。

これに対して、日本語学は共時的に現代日本語の文法を記述し、その用法を説明することにより、文法構造を探り出すことを主眼としている。日本語学は、日本語を世界の言語の一つとして、他の言語と同等の基盤で扱おうとしている。日本語の特色を明らかにするために他言語との比較が行われ、対照研究が盛んになってきた。

特に、1980年代になると、多くの学問分野で新しい発展が見られ、それまでになかった問題設定や分析方法が出された結果、今日につながる形での認知科学が大きく発展した。その中で、広い視野に立って言語の探求を進めようとする試みがこの時代から活発になっていった。それは次第に明瞭な形をとり、認知言語学という分野が成立することになった。1980年代の後半には認知言語学理論上の指導者であるG. レイコフ(George Lakoff)とラネカー(Ronald W. Langacker)の著作を初めとして重要な成果が相次いだ。認知言語学はそれまでの構造主義言語学や生成文法理論などが言語の形態・規則性を主な対象としてきたことを批判的に捉え、人間の心の中で捉えられる「意味」に踏み込もうと考えたからである。それは卓越した特定の研究理論によるものより、人類や心理学などを始めとする隣接諸分野との連結によって発展